掲載日:2010年01月11日，面名:センB，記事ID:KIJ20100111_M0030000100KT09001

(C)新潟日報社

忘れまい「阪神・淡路」

こばやし・いくお　阪神・淡路大震災からの復興に携わってこられた、都市計画、まちづくりの専門家として、神戸山手大学現代社会学部教授、人と防災未来センター長研究員。

震災から15年 兵庫の取り組みを聞く

1995年に発生した阪神・淡路大震災から今年で15年。節目の年を迎え、長期復興を進めてきたさまざまな行事が企画されている。しかし復興が着実に進む一方で、被災の記憶や記録が失われていくことを懸念する声もある。阪神・淡路大震災を伝えることに取り組んでいる3人に話を聞いた。

被災者と学び合いを

阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク世話人　小林　郁雄さん

時とともに震災の記憶の方、人々のきずなや連帯が薄れ、日常の話に出なくなるのは当然のこと。15年しかたっていない神戸でも、震災を体験していない住民が増えている。そのうち世代が交代すれば、震災は自分のことではなく歴史上の出来事になる。どんなに悲しい被災体験があっても、次第に忘れられていくのはしようがないことだ。

しかし被災体験の中には、被災時と年を経た現在、震災に強い地域の在り方、人々のきずなや連帯など、防災や協働のしみ、中間支援組織などが重要な役割を果たしてきたことも、伝えるべきだろう。

その意味で被災体験を伝えることは、世代を超えて、ある社会体験を共有すべき貴重な知恵であり情報だ。悲しいからと忘れ去り、風化させてはいけない。体験したことを教訓として取り組みも必要だ。そしては、行政や研究機関や研究チームが、資料の収集、整理、保存・公開している。何をそなえるにしても、基礎となる資料がなければ話にならない。必要な時に、すぐ取り出せるようにしておくことは、災害の教訓を生かす上で重要だ。人と防災に関する資料の収集・整理は重要だ。人と防災に関する資料の収集・整理は重要だ。人と防災に関する資料の収集・整理は